

[特集2]

博覧会と近代日本

19世紀は、博覧会の時代でした。1798年、革命の混乱により衰退した産業を復興すべく、フランス政府はパリの郊外で、産業博覧会を開催しました。これが、公的な性格をもった世界で最初の国内博覧会といわれています。フランスはそれ以後、1849年までの半世紀間、計11回もの産業博覧会をパリで催しました。パリ博覧会の成功に刺激され、フランスの地方都市、さらにはイタリアやドイツをはじめとしたヨーロッパ各国でも博覧会が開かれ、しだいに規模を拡大してゆくこととなります。

そして1851年、イギリス政府により最初の万国博覧会がロンドンで開かれました。万国博覧会はその後、1953年のニューヨーク、55年のパリ、62年に再びロンドンとつづき、19世紀中に計14回開催されています。初代駐日総領事のイギリス人オールコックにより、1862年のロンドン万博に出品されたのが、万博における最初の日本展示ですが、徳川幕府が正式に参加したのは、1867年のパリ万博からでした。また、明治政府がヨーロッパの万博をモデルとし、第1回内国博覧会を開催したのが、1877年でした。

このように19世紀の申し子ともいえる博覧会に、日本はどのように対応し、関わりをもっていったのか。こうした問題意識のもとに、今回のシンポジウムでは、学習院大学東洋文化研究所客員研究員の伊藤真実子先生、国際日本文化研究センター准教授の佐野真由子先生、帝京大学准教授の濱田陽先生をお招きし、それぞれの専門の立場から報告をいただきました。

まず、伊藤真実子先生には、18世紀の寺島良庵『和漢三才図会』、貝原益軒『大和本草』から、明治以降の『百科全書』、『古事類苑』まで、そして万博への参加、および内国博覧会を開くにいたる流れを報告いただきました。『三才図会』や『本草綱目』など、漢書を基礎としつつ、18世紀以降、薬物調査などの進展とともに、文献考証中心だった本草学に、物産学がむすびつき、博物学化していったこと、また19世紀初頭にシヨメルの『百科全書』が翻訳された際、アルファベット順の分類が、天文・地土、鉱物といったように分類し直されたことなど、輸入学問をとりいれながらも、独自の変容をとげた日本の知のありようをくわしく説明いただきました。幕末以降の万博参加、内国勸業博覧会も、こうした知の流れに立って考察しなければならないことを改めて感じた次第です。

佐野真由子先生には、日本の品物がはじめて展示された1862年の第2回ロンドン万博をめぐる主催者、媒介者、参加者という3者のそれぞれ複雑にからみあった意図やまなざしについて報告いただきました。主催者であるイギリス政府は当初、参加国からよせられた文物を、今日

のような各国ごとのパビリオンでなく、自らが定めた40項目のもとに改めて分類することを考えていました。また、媒介者役をつとめた駐日総領事のオールコックは、万博への出品を、みずからのキャリアの集大成と位置づけていました。他方、参加者側であった幕府役人は、現地でオールコックが選定した骨董品のような日本の出品物を見て、不満をいだきつつも、漆器の精巧さを誇らしげに感じていました。このように三者三様、さまざまな思惑があったとのご指摘は、さまざまな角度から万博を考える必要性を再認識させるものでありました。

濱田陽先生には、明治時代から今日にいたる日本の博覧会と宗教の関連について報告いただきました。日本ではじめて「博覧会」と銘うたれた1871年の京都博覧会の会場が、西本願寺であったように、日本の博覧会は当初から宗教と関わりをもっていました。また、1893年のシカゴ万博では平等院鳳凰堂を、1900年のパリ万博では法隆寺金堂を、それぞれ模した日本館が建造されました。こうした博覧会と宗教の結びつきは、戦後までひきつがれ、1947年に善光寺開帳平和博覧会、1950年に金沢で宗教平和博覧会が開かれました。最近では、南紀熊野体験博とといった「こころ」や「癒し」をテーマとした新しい博覧会の動きがあり、博覧会において宗教の果たす役割が再び重要になってくるのではないかという指摘は、非常に示唆に富むものでした。

この3方のご報告の後、新潟大学の蓮田隆志先生よりコメントをいただき、報告者と参加者の間で活発な意見が交わされました。普遍性と地域性、ドイツの事例との比較など、「博覧会と近代日本」というテーマのもとに、幅ひろい実りある議論をおこなうことができました。なお、今号では、報告いただいた3方の内、伊藤真実子先生の論文「19世紀日本の知の潮流」を掲載いたします。

(文責 S. M.)